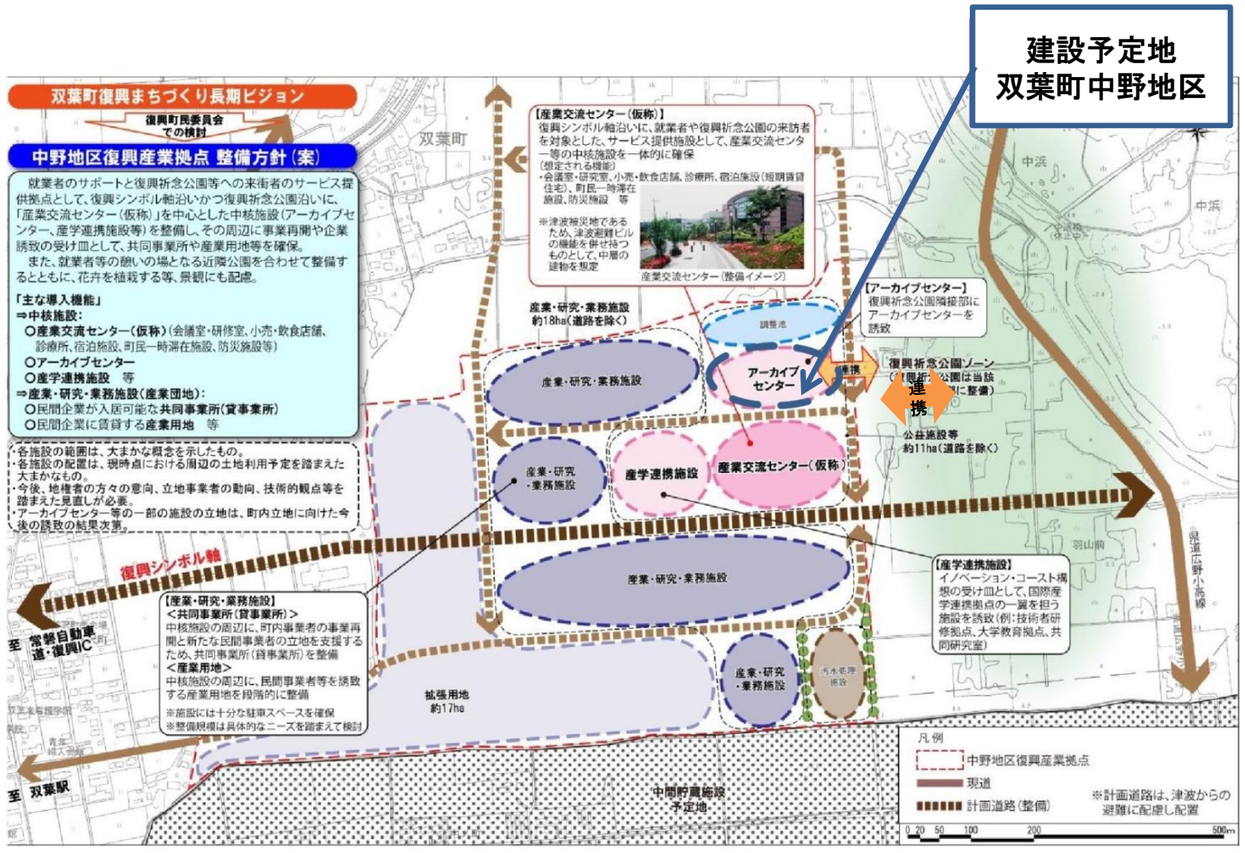
東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設
基本構想検討会議資料（第3回）

2016年10月24日

福島県企画調整部文化スポーツ局
生涯学習課

1. 建設予定地概要

現　地　の　状　況			
項　　目	内　　容		
土地の規模・形状・取得の容易性	規模	約1.7ha	
	形状	整形地（ほぼ平地）	
	取得	中野地区復興産業拠点として町が整備予定	
位置等	位置	復興祈念公園予定地の南西に隣接する沿岸部	
	1Fからの距離	直線で約4.3km	
	アクセス	最寄IC	双葉IC（仮称・H31完成予定）から約7km
		東京～鉄道等	東京-福島-現地…約3.5時間



（双葉町内復興拠点　基本構想より）

2. 産業交流センター（双葉町立）と連携した整備の推進

隣接する産業交流センターと、機能の共有や連携をはかることで、
お互いの施設を効率的かつ効果的に運用していくことを目指す。

3. 復興祈念公園や周辺市町村との連携、役割分担

復興祈念公園や県内市町村で整備される施設の内容や体験に特徴がでるよう、
各施設の役割、目的を整理する。

市町村アーカイブ施設

・相馬市伝承鎮魂祈念館
（2015.04.01オープン）
・いわき市震災メモリアル施設（仮）
（2019.03オープン予定）　など

復興祈念公園

(1)すべての犠牲者への追悼と鎮魂
(2)ふくしまへの想いを育む
(3)被災の経験を将来につなげる
(4)復興へ向けて取り組む姿を示す

※復興祈念公園のあり方（基本構想への県提言）より

連携

アーカイブ拠点施設

(1)複合災害と復興の記録・教訓の未来への継承、世界との共有
(2)経験や教訓を活かし、防災・減災を学ぶ
(3)福島に心を寄せる人・団体と連携、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等、復興の加速化へ寄与する

《災害の対象範囲》

福島第一原子力発電所事故による原子力災害

東日本大震災
(地震、津波)

人類史上経験のない複合災害の経験・教訓を発信

■展示・事業活動の方針と3つの展開ポイント

ふくしまの現在進行形で進む原子力災害・防災

これまでの“教訓”と“これから”のアーカイブ

原子力との共存共栄を保ってきたふくしま。原子力による恩恵、そこには何気ない日常が存在しました。
2011年3月11日14時46分に一変するまでは・・・
あの日から、ふくしまが体験した光と影、そして現在進行形で体験していることを後世に遺し伝えることで、原子力災害を学び、来館者それぞれが考える“きっかけ”となる場を目指します。
そして、原子力災害を二度と起こさないこと、また万が一への備えや復興にむけた最新の取組を国内外に発信することで、ふくしまだからこそできる世界でただ一つの原子力防災・復興の発信拠点を実現していきます。

1. 世界初の経験を記録し発信する

原子力災害・原子力防災に関する
「蓄積型」＋「体験型」で学習

2. 生の声を伝え蓄積する

「人」「語り部」を通して
県民の想いを国内外に発信

3. 日々変わる最新の姿（教訓と新たな取り組み）を発信

ふくしまの最前線～光と影～を
「リアルタイム」で発信

■展示ストーリー

事故前後の「事実」、ふくしまの「経験」を“教訓”として発信し、未来への“原子力防災”や“まちづくり”に活かす

周辺地域・施設へ

	1	2	3	4	5	6	これからのふくしまを創る最前線（現地）へ
ねらい	○展示全体のガイダンスとしてシアター形式で紹介。 ○原発との共存共栄とともにあった「何気ない日常」や原発が近くにあることさえ認識していなかった日常が、事故により一変したことを紹介。 ○「安全神話の崩壊」「情報の錯綜」「避難・一時帰宅」「一変する生活」「放射線への不安」「帰還にむけた取組」など原子力災害で経験してきたことを強く紹介。	○原子力災害のきっかけとなった、想定を超える地震と津波を紹介。 ○地震・津波とともに、福島第一原発の事故を後世にしっかりと残し伝えるとともに、未曾有の危機に際して何が行われたか、判断されたのか。現場で起こったことを改めて振り返る。	○誰もが初めて経験する原子力災害直後の状況を、避難などの様子からその特殊性を訴求。 ○国内外の事故事例などを参考とした県下での手探りの初期対応、国内外からの注目など、避難やスクリーニング、伝えられない情報等、原子力災害の初動の記録と記憶を、証言などをもとに振り返り、後世への教訓の場とする。	○安全神話の中にあった、何気ない「ふるさとの日常」と、原発事故後の変化を、県民の「記憶（証言・筆跡・手記等）」と、県下の「記録（事実・データ等）」を組み合わせて蓄積し発信。 ○原子力災害により一変した環境、風評被害、放射線に対する理解の違いによる軋轢、産業への打撃など、原子力災害特有の事象を中心に後世に遺す。	○原子力災害が長期化する中で、ふくしま（特に避難市町村）がどのように対応してきたか、その「影響」と「対応」そして「教訓」を資料や体験を通して、原子力防災学習につなげる。 ○原子力防災に関する教育や企業等の研修に活用することで、気づき・学びを提供する場とするとともに、甲状腺検査などいつまでもつづく健康調査等の現実を伝える。	○新たな農作物の栽培法の模索や、遊びの質を高める取組み等の事例を通して、復興に挑戦するふくしまを紹介。 ○帰れないと思われていた故郷にもう一度戻り、新しいまちづくりを進める、世界初の取組み、将来像をリアルタイムに発信。 ○浜通りの産業・雇用回復を目指すイノベーションコースト構想と連携した先端技術の紹介や企業との連携も実施。	○ロボットテストフィールド ○東京電力福島第一原子力発電所 ○廃炉国際共同研究棟 ○Jヴィレッジ ○イノベーションコースト各企業の拠点 ○浜通り・各自治体の追悼・メモリアル・防災拠点 など

■これまでの意見集約

【平成27年度有識者会議提言書より】

- 世界初の複合災害と復興の記録や教訓の未来への継承･世界との共有
- 福島にしかない複合災害の経験や教訓を活かす防災･減災
- 福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化･伝統の再生、復興を担う人材の育成等による、復興の加速化への寄与

機能1：正確でリアルタイムな情報発信
機能2：訪れる多くの人々に効果的に伝える展示
機能3：後世に正しく伝える教育
機能4：地域コミュニティの再生に資する様々な交流
機能5：復興を担う人材育成
機能6：災害の記録や資料の収集･保存
機能7：複合災害の実態と教訓の継承･共有のための調査研究

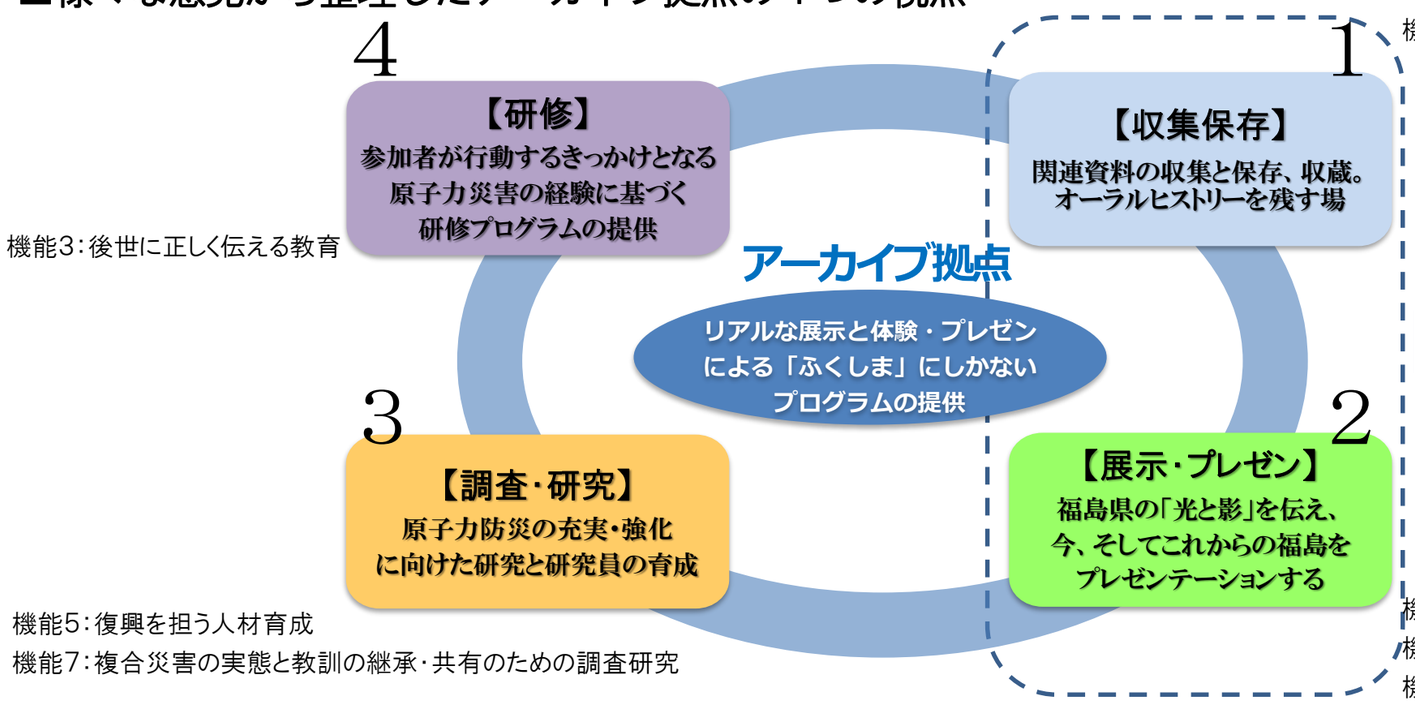
【検討会及びヒアリング意見】

- 原子力災害が起きたという事実、それによって強いられた暮らし、そこから学んだこと、これらを広く伝えることによって、「原子力防災」の知識や行動を世界に発信すべき。
- 原子力についての正しい知識を学ぶ。豊かになりたいという願いは危険と隣り合わせのものだった。このリスクを背負っても必要なエネルギーか？一人ひとりが考えられる場。
- 3．11スタートではなく、日常から原発誘致、地域の歴史があり、そこから災害→復興へ～そういうことをライブで伝えていける場にすべき。
- 原子力災害は完結していない。だから今でもこの災害は進行形であることを伝える。
- 震災を体験した方たち、特に若い世代が自分の言葉で自分の体験や、今の思い、これから先の福島や自分の人生をどう考えるか、などを発信できる場。
- 福島県の良さ、伝統など、すばらしい福島県の中での出来事が復興の形でまた再興している様子を伝えたい。
- 福島県内にある様々な震災関連施設をつなぐキーステーションであるべき。

【県民意見（H28シンポジウム　アンケートより）】

- 物だけでなく、人の言葉を残したい
- 福島のネガとポジ、両方をつたえるべき
- 残す、だけでなく、伝え続ける
- ふるさとの風土、ことば、行事などを残したい。
- 希望を捨てずに前進していく、その過程を伝えたい。
- 人間が抗うことができない自然災害は本当に起こり、どんな困難も人は人とつながることで、乗り越えることができること。
- 震災の教訓。特に津波被害の記録⇒若い人々への防災教育に活かしていきたい。
- 震災からの復旧･復興に向けて様々な人々が努力･協力してきた記録。復旧･復興に向けて協力してくれた方達への「ありがとう」という感謝の気持ち。
- 残念ながら起こってしまった原発事故。その事実は正確に残し、その上でどの様に復興して行くのかを記録としてこそ、後世に役立つ記録となり得ると思う。
- 震災前と震災後（継承の状況）
- 人と人とが語り継ぐ場を残して欲しい。
- 震災の記録、原子力発電所の功罪の記録、復興の記録、3.11の出来事の語り手の育成と記憶できる施設。

■様々な意見から整理したアーカイブ拠点の４つの視点



帰還の促進へつながるような
県民参加の機会の創出

経験や記憶を**言葉で伝える**展示
福島の**挑戦をプレゼンテーション**する

■県民参加のしくみの検討

県民参加の機会の創出

- ･個別事業の企画や運営
- ･企画への参加
- ･語り部や解説業務
- ･施設内でのイベント開催　など

効果

〇活き活きとした県民の姿が帰還への後押しとなる。

〇県民や県外の人が集い地域の再生を願う機会となる

〇活躍の場の創出により、具体的な帰還へとつながる。

■県民参加のステップ

〇開館前から各ステップへ参加することよって、本施設への愛着を育て、開館後の県民の積極的な事業参加へつなげます。

2016(平成28)年度

2016年度は、構想の始まりとして、現状整理と個別活動の情報収集を中心に、今後の可能性を探る期間とする。

活動内容

- シンポジウムの開催
- 3.11集会
- 展示会

県民参加スタッフ育成の流れ

目的

内容

成果物

広報

2017(平成29)年度

理念の統一・仲間づくり

- 県民の意識、実態調査等の分析
- 離ればなれになっている人々が再会できる場での周知
- 仲間づくり
- 大学や企業等を含めた協働プログラムの検証
- 活動報告

再会の場づくりイベントなど

- 収集資料
- 体験記録

計画の周知と事業の気運づくり

- 本施設のコンセプトや施設概要などを広報していく(チラシなど)

2018(平成30)年度

協働関係づくり

- ボランティアの組織化に伴う設立準備委員会の立ち上げ
- 協働イベントのプレ開催
- ビジュアルイメージづくり
- スキルアップ研修
- 活動報告(県民への周知)

お試しイベントの開催

- 活動報告(かわら版)
- ボランティアの運営実施設計書
- ビジュアルイメージ

館のイメージをビジュアル化

施設の具体的イメージの周知

- プレイベントの開催で、県民に活動を体験してもらい、どんな施設が出来るかを伝えていく
- 施設のロゴやキャラクター、イメージソングを県内で多用していく事で、イメージの確立、開館への期待感を醸成していく
- 報道、マスコミに対して、開館前から話題を提供していく

2019(平成31)年度

ボランティアの運営体制づくり

- ボランティアの組織化、稼働
- 協働イベントをプレ開催
- マニュアルづくり
- 開館に向けての企画と準備
- スキルアップ研修
- 実地の訓練
  (AED、消防、人命救助等)
- スタッフ研修
- パンフレットの作成
- 活動報告(県民に周知)

運営組織の稼働

- 活動報告(かわら版)
- スタッフマニュアル
- 運営マニュアル
- 次年度プログラムと予算書
- ポスター･チラシ･パンフレット

運営マニュアルづくり

参加の輪を広げる活動内容の広報
区内外に開館PR、集客の広報

- 各学校や周辺地域に向けて、パンフレットやPRDVDを配布
- 関係雑誌への記事掲載
- 県内メディアを使った積極的な広報
- 参加者による口コミ広報

2020(平成32)年度

運営開始

開館後の参加のしくみ

1. 展示企画への参加
   地元、復興に活躍する方、アーカイブを支援する方など地元住民で組織する企画会議の実施。

2. 日常的な運営への参加

   スタッフとしての参加
   常設展示管理、資料閲覧受付等、施設の日常的な運営支援スタッフ。
   常設展示解説など、一定の知識や技術を要するスタッフ。
   これらの人材は、類似活動を行っている既存のNPO法人やグループ、個人などを募るとともに、当施設においても育成プログラムを実施し、人材育成を行う。
   メンバー登録制とし、シフト制または事業にあわせてスケジュールをたてて参加を要請する。

3. 個別事業、イベント等への参加

   (1)県民開催の事業
   県民の企画、主催事業。
   既存の団体やグループがその活動やテーマ、経験、知識を活かしたプログラムを企画し、自ら主催者となって実施する。
   スタッフは、主催する団体、グループのメンバーを中心に、必要に応じ一般スタッフの参画も募って実施する。

   (2)県民企画事業の開催
   県民参加企画による当施設の主催の事業。
   個人や既存の団体、グループがその経験、知識を活かしたプログラムを企画し、その企画に基づいて当施設が主催者となって実施する。
   企画者はプログラム実施のリーダー的な役割を果たし、その他スタッフは県民参加を募って実施する。

主な意見

ふるさとの日常

生活
→家庭（これは人によって異なる）、乗り降りする電車の駅、商店街での買い物、隣組の付き合い

風景
→築場（サケ）、町の中にあった大きな木、キンモクセイの香り、三ツ森山のあじさい、桜（坂下ダム、駅前の公園）

特産
→フルーツ類（特産の梨やキウイ）

普通だった暮らし。家族、コミュニティ。

原発との共存共栄

大熊町にとって、とりわけ商工業者にとって、原発は働く場所であった。生活であり、日常であった。

避難所にいたときも、そこにいる同じ被災者の地元の人達が、地震の次の日から、原発に向かっていっていた。
町の人達がこれ以上の被害が出ないように必死になっていた。

震災前、富岡町は若者から高齢者までがバランスよくいる安定した町だった。多くの人が電力関係の仕事に就き、原発と折り合いを付けながら、収入を得、繁栄していた。しかし事故が起こったことで、先人たちは後世にとんでもない負債を背負わせてしまった。今、そういって泣くお年寄りの姿がある、そして、今度は原発を廃炉にするのは自分たちの果たさなければならない責任だと言って、現場に向かう作業員がいる。

リアルな声で伝える

一人ひとりの言葉を積み重ねて、「言葉」を残して欲しい。一万人が語れば、一万人の重みがある。

作業員、色んな人の声を収録した言葉の記録が聞けたり、語り部の生の声による案内が必要。

地元の若い世代（例えば双葉みらい学園）との連携。双葉に居る意味、学ぶ意味を高校生たちにもつくってあげたい。

アーカイブ拠点として

原発、放射性物質に対する知識を全国民がもつ必要性を発信し、学習できる場。

正しい情報、事実を残す→そこから学ぶ→教訓→同じ失敗を繰り返さない。　という発信。

「天災」ではなく「人災」。「原発事故」と簡単に言うが、いろんなことが原因にあっての原発事故。その「いろんなこと」が何なのか。そこには人の手が常に入って、結果として今の避難生活となった。今後このようなことがおきないで欲しいから、そのためにどうしたらいいのかということを、教訓として伝える。

原子力についての正しい知識を学ぶ。豊かになりたいという願いは危険と隣り合わせのものだった。このリスクを背負っても必要なエネルギーか？一人ひとりが考えられる機会。

震災後、公務員も不眠不休で働いた。命に関わる判断を分単位でやらなければならなかった。そのストーリーこそが防災になる。災害がおきたときの意思決定、プロセスを防災学習の教材として生かしていくべき。。

福島県内にある様々な震災関連施設をつなぐキーステーションであるべき。

人を誘引するしくみづくりが必要。アクセスする道程も導入となるようなプランづくり。例えば、バリケードで囲まれている6号線をさかのぼりながらその様子にふれ、アーカイブセンターで学び、復興祈念公園を見学するなど、総合的なプラン。

ふくしまのこれから、挑戦、未来へむけて

住民が一旦ゼロになって、ゴーストタウンになった町にもう一回戻ろうというこのチャレンジは、二度と起きてはいけないということも含めて、最初で最後のチャレンジ。

10キロ圏内は現代日本の最後のフロンティア。なんとなく閉塞感のある日本全体のもしかするとモデルになるような町にできるのではないかと思う。

これからは自分たちの地域の課題を自分たちで解決していく、そういう風土をつくって50年後100年後に振り返ったときに最適化された持続可能な町が避難区域にできている可能性があると感じている。

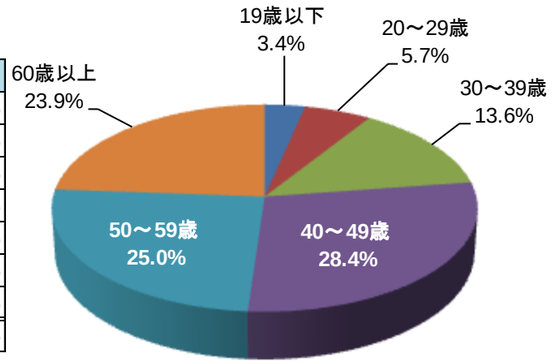
日常と未来は形を変えた同じものではないか？かつてあった普通の風景や生活が、事故によって形を変えてしまったけれど、良い形に生まれ変わる、こうなったらいいなという夢や希望が未来であり、残したいもの。そしてその夢や希望が現実になっていくのがこれからの福島の復興。

2016年8月20日（土）
【ふくしまの記憶と記録、未来に伝えるシンポジウム】来場者アンケート結果

＊最大数を赤字表記

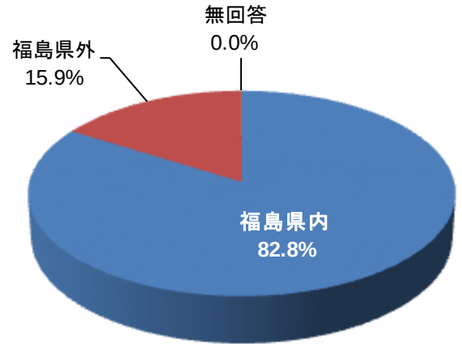
■年齢

		件数	比率
1	19歳以下	3	3.4%
2	20～29歳	5	5.7%
3	30～39歳	12	13.6%
4	40～49歳	25	28.4%
5	50～59歳	22	25.0%
6	60歳以上	21	23.9%
	無回答	0	0.0%
合計		88	100.0%



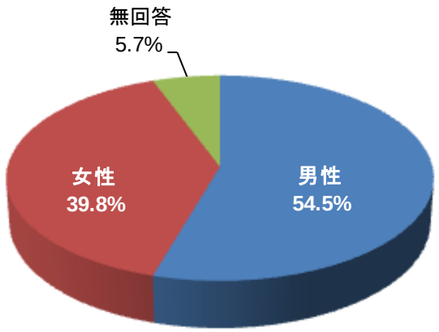
■住所

		件数	比率
1	福島県内	72	82.8%
2	福島県外	13	15.9%
	無回答	3	0.0%
合計		87	100.0%



■性別

		件数	比率
1	男性	48	54.5%
2	女性	35	39.8%
	無回答	5	5.7%
合計		88	100.0%



「1.福島県内」とご回答の方

	件数
いわき市	3
伊達郡国見町（元他県民）	1
伊達市	3
会津若松市	1
喜多方市	2
郡山市	13
須賀川市	1
双葉郡大熊町	1
双葉郡楢葉町	1
双葉郡浪江町	2
田村郡三春町	4
田村市	4
東白川郡矢祭町	1
二本松市	3
白河市	1
福島市	29
本宮市	1
耶麻郡猪苗代町	1
合計	72

「2.福島県外」とご回答の方

	件数
宮城県	2
東京都	4
茨城県日立市（双葉町出身）	1
宮城県仙台市	3
神奈川県相模原市	1
栃木県那須塩原市	2
合計	13

主な意見

Q2_本日の対談、パネルディスカッションのなかで、印象に残ったことはどんな内容でしたか。

①後世へ伝えつづけることの大切さ

- 「挑戦するスピリッツを後世に伝え続けることが、我々の使命である」
- 震災の記憶や記録（過去）を残すのではなく、現在の様子などを伝えることの大切さ。
- 「未来へ残す」というと過去の出来事のことしか考えていなかった。が、「未来への指針につながる議論が出来る場や、考える場」という、これからにつながることを残すべきだという意見が印象に残った。
- 復興に向け挑戦するスピリッツと行動する姿を伝える。 人の言葉を残し続ける。
- 残すのではない、伝え続ける。
- ふくしまの過去・現在・未来を後世に伝えてゆく必要性。

②夢・希望・挑戦・誇り

- やれば出来る、やらないよりやった方が良い。
- 挑戦する事の大切さ、あきらめず継続する事の大切さを再確認しました。
- 「挑戦する思いが重要である」と言う事に共感。県民自らがアクションを起こさない限り、他への発信はできない。
- 「挑戦」することは「失敗」することと同義だが、失敗しても起き続け挑戦し続けることが大切だとの考え。
- 「奇跡は絶対に起こせます」。夢を高く掲げて震災前より良い福島を目指して、みんなで挑戦を続けようという力強いメッセージ。
- なすびさんがそうだったように、自分に出来ること、そこを自分なりに考えることが大切だと感じた。
- 夢、希望、挑戦、誇りを持ち、継続することの大切さ（起き上がり小法師）。
- 「テレビの内容を他人事としてとらえないで、どうしたら復興できるか、自分に何が出来るか」ということに共感した。

③光と影の両方を伝える

- 前向きに考えることだけでなく、振り返ることも同時に行いたいということ。
- ふくしまのネガティブ、ポジティブ両方の記録を残して下さい。
- マイナス面ばかりでなく光の部分を残すということ。 復活に向けた動きというものをより取上げるべき。

④アーカイブ拠点について/未来へ向けて

- 大震災がなければ、という考えが自分の中にあったが、起きてしまったことを素直に受け入れて、これから一つ一つ良くしていくことが大事と思った。
- 震災が発生したからこそ出来る、新しいものを創造出来る。
- 未来に向けて福島を発信していくこと。
- 未来に対して意見を交換できる、伝える人材を育成する場。アーカイブを見て、その後、県全体を巡っていけるような場所に。
- 物ではなく、人の言葉を残すべき。
- 教訓の伝承などの必要を感じた。防災教育（自分で考えるような）などの視点が大切と思う。

Q3_震災によって変わってしまったと感じることはどんなことですか。

①家族・地域のコミュニティ

- 家族、地域の人々の絆がなくなっている。人生の楽しみを一時に失った事で、人生が人生の先が見通す事が出来ない。
- 地域同士のつながり（避難によって）が、弱くなってった。震災があり、福島の良さは何か、改めて考え、実感できた。
- 福島特有の地域コミュニティ・結の精神、お互いさまの考えが、やや薄れてきて、我を強調しすぎてきている気がすること。

②人の心

- 良くも悪くも人間としての価値観。一瞬の出来事で、文化・文明が築いてきたものが、なす術なく破壊されてしまう、という虚しさと、それを経験した人間の力強さ。
- 人の心がすさんでしまったのではないか、すべて賠償・賠償に結びつけ、自主独立の気持ちが弱くなってしまった。
- 被害者の立場を主張する声ばかり、大きく聞こえる。被害者意識の主張ばかり。
- 日本から世界から、取り残されているような隔離されているような感覚がずっと続いている。
- 人と人の境界線が強くなってしまった。震災という言葉に過敏になっている世の中で、解消していくことは難しいと思いました。
- 「人の心」 良くも悪くも人の心の闇をさらけだした事。被災地と首都圏の温度差はすさまじい。1年たてば他人事、2年たてば過去、3年たてば教科書の中、4年で歴史の中、5年たったら「いつまで被災者面しているの？」そんな現実を垣間見る。
- 県外の人達で、福島出身と知ったときに何か思われるのではないかと思う自分自身。
- 自分自身、福島県民であることを、どう受け止めていいか分からなく感じる。

③暮らし

- 除染 → 廃棄物が庭に埋っている。
- 人口の減少、産業がなくなる（変わる）状況。
- 放射線量を気にしたり、食べ物を気にしたりすること。
- 自由に山の物・海の物を取って食べることができなくなったこと。
- 山に好きな山菜を取りに行けないことや、作っても子供が食べない、送れないと。生きがいを奪われてしまったよう。
- 風評被害がひどく、観光客が減少してしまった事。
- 未来を考えるときに、復興の進み具合とか、放射線のこととかを抜きには考えられなくなってしまったこと。
- 原発事故による生活環境の激変。避難対象となっている人々の日常生活の崩壊した事。
- 好きなルートで移転出来なくなった。（浜通りへの移動）。 県外の人と話をすると、「人が住めるんですか」という認識。
- 海外、県外からの福島の印象。
- 日常の生活、学校、仕事。
- 子どもたちの学びの環境
- 福島の自然や動物体系。
- 原子力発電所の事故、放射線という言葉が身近になった。震災前までは福島県（中通り）に住んでいても、原発に関心がなかった。
- 避難されて来られた方々が生活されるようになり、少し生活環境が変わった

主な意見

Q4_復興、復旧を通して、震災前に比べて良くなったと感じることはどんなことですか。

①福島について考えるようになった

- 震災の逆境をバネに何くそ！と頑張る人が増えた。 世の中や人生に対する強い思いを持つ子供たちが増えた。
- 震災を経験したからこそできることがあり、やる人がいる。助けてくれる人がいる。『日本て本当に素晴らしい国』感謝の気持ちをもって生きていけることができた。
- 復旧・復興に取り組んできた経験、これを「誇り」として努力できる気持ち。
- 福島出身の県外在住者が、ふるさとに対する想いが強くなり、改めて福島を見直すきっかけとなった。復興に携わりたい、地元に戻って暮らしたいという人が増えた。
- 伝統・文化・行事の重要性。
- 若者が積極的に地域に関わる機会が増えたように思う。

②注目されるようになった

- 良くも悪くも注目を浴びるようになったこと。外部からの注目が集まることで、発展のチャンスが生まれると思う。
- 観光や食べ物など、積極的な工夫されたアピールが印象に強くある。どんな形でも福島を知ってもらえているような気がして良いと思う。
- 県民が「ふくしま」のことを常に意識するようになったように感じます。

③これまでになかったもの、新しいものとの出会い

- ロボット産業や先端医療など、福島県の新しい展望が開いてきたように思う。
- 環境創造センターのような放射線などについて学べる施設ができたこと。
- エネルギーに関する考え方が変わった事。安全安心といわれた原子力が、そうではない事を思い知り、再生エネルギーの必要を強く感じている。
- 防災集団移転による新しい街並みの形成により、新たな街や暮らしが生まれた事。
- 新しい事業推進プランが多く出されている。未だ時間のかかる事業が多いが、チャレンジする意欲を持てる。
- 原発に対する正しい考え方。

④連携、協力

- 自治体、住民、関係機関が連携し復興に尽力している姿。
- 絆の大切さ。
- 福島について、いろいろと考えることができた。
- 自分自身が福島県民であることを意識させられた。福島県民であることを胸をはって発信していた。
- 1つの目標に向かって、全員が団結する気持ちを持てたこと。（但し、ネガティブ、マイナスからのスタートのため、達成まで時間がかかり困難なことは多々あると思う。）
- 中・浜・会津での地域間の人の交流。
- 福島県民の頑張って負けない福島をつくろうとしている県民の姿が力強いことに感動しました。
- 福島県民が復興へ向かって、同じ目標を持ち、取り組んでいる事。

Q5_「未来へ残したい記憶や記録」はどんなことですか。

①ふるさと

- 故郷の原風景と将来に向けてのビジョン、その経過。
- 地元の行事、言葉、景観。 地震（震災）の前・後の記憶。
- 地元の大熊町での思い出。薄れていく記憶をみんなと共有したい。
- 沿岸地域の文化財。残すだけでなく活用することが不可欠。

②災害のおそろしさ、事実

- 3.11以降の物語。浪江町の消防団物語「無念」、紙芝居、アニメーションとして上映、上演されている。今後、双葉浪江の復興祈念公園に保管、上映等を行い後世に引継ぐ事が大切である。
- 原子力発電所の事故がもたらした自然の荒廃と、過酷な避難生活の状況。
- 震災の教訓。特に津波被害の記録⇒若い人々への防災教育に活かしていきたい。
- 「原子力発電所について」事故後についてだけでなく、福島県に原発ができることになったいきさつなど、昔のことから、事故直前、事故後を時系列に。できるだけ客観的に、多様な視点からのもの。
- 残念ながら起こってしまった原発事故。その事実は正確に残し、その上でどの様に復興して行くのかを記録としてこそ、後世に役立つ記録となり得ると思う。
- 政府・行政の避難勧告後も、危険区域で残った人の記録。過去の津波の教訓として残されていた石碑や文献。それが伝わっていれば、守れた命があったはずだから。

③人のことば

- 写真や映像だけでなく、震災を体験した人達の話（過去-現在-未来）。
- 多くの人の声を映像として残す。（人から聞いたことはダメで、自分が体験した事実のみ。）
- 震災の記憶集を作りました（3年間かけて）。これを残し、全世界に向け発信したい。

④復興への過程

- 復興への取組のひとつひとつ。生々しい情報も含めて、後世に遺して欲しい。
- 3.11のような複合大災害が起きても、希望を捨てずに前に進んで行けるという事実を語り継いでいきたい。
- 報道は人数しか伝えないが、その数の分だけある生活。余震が続く中、救援に来てくれた諸外国の記録も背景含めて。恩返し。
- 悲惨な事実は事実として伝え、復興している様子、子供達が元気に外で遊んでいる様子も伝えて欲しい。
- 震災からの復旧・復興に向けて様々な人々が努力・協力してきた記録。復旧・復興に向けて協力してくれた方達への「ありがとう」という感謝の気持ち。
- 記憶や記録を残すのではなく、一日一日を伝えていきたい。

⑤アーカイブセンターについて

- アーカイブスセンターには是非、人と人とが語り継ぐ人材育成の場を残して欲しい。
- 3.11、福島に関する新聞記事、民放・NHKの放送番組、報道などを集めておいて、アーカイブ施設で見ることができる。アーカイブ施設に、自由ノートや入力可能なPC・タブレットを置き、来訪者が書いたものを他の人が見たり共有できるようにして、記憶を拡げ残してほしい。
- ビキニ諸島・第五福龍丸・チェルノブイリなどとの交流・意見交換会など。・長野県上田市にある「無言館」みたいな残し方もありなのでは？
- 震災の記録、原子力発電所の功罪の記録、復興の記録、3.11の出来事の語り手の育成と記憶できる施設。
- 企業がどう行動したかの記録。
- 外部電源に依存しないエネルギー自立型の建物の考え方を検討して欲しい。
- 原発事故からの復興のシンボルとして、再生エネルギーと超省エネによるエネルギー自立型の思想を世界に発信して欲しい。